



VOS

No.198
2017.March

祝 卒業・修了

Page 02. 学長メッセージ

Page 04. 副学長・市長メッセージ

Page 06. 卒業・修了にあたって
卒業・修了生から／
専攻長・基盤共通教育部長から

Page 15. 贈る言葉
同窓会／むつみ会から

Page 16. 全国高専めぐり

Page 17. 退職にあたって

Page 20. 編集後記

卒業・修了を祝して



長岡技術科学大学 学長

東 信彦

N o b u h i k o A z u m a

グローバルに活躍を



卒業・修了おめでとうございます。学士、修士、博士それぞれの学位を得た皆さんの長年の研鑽とその成果に敬意を表し心からお祝いを申し上げます。併せて、長年にわたって皆さんを支え見守ってこられたご家族の方々に心よりお礼とお祝いを申し上げます。

留学生の皆さんは、故国を遠く離れ、言語・文化の異なるところでの生活、学習には大きな苦労があったことと思います。幾多の困難を乗り越えて今日の日を迎えられましたことに敬意を表します。国内はもとより、広く海外の地から集まった文化の異なる多くの人たちと出会い、ともに語り、時にはぶつかり合って過ごしたこの数年は、皆さんの精神に大きな成長を促した時期であり、そこで得た友人は皆さんのこれからの人生でかけがえない財産となります。そしてこの長岡の地は、青春期の故郷として皆さんの心に長くとどまることと思います。本学は、昨年の10月に開学40周年を迎えました。これまでに学部卒業

生14,849名、大学院修了生12,481名を世に送り出し、卒業生・修了生は世界の第一線の様々な分野で活躍しておられます。最近ある新聞社が行った企業の人事担当者から見た大学のイメージ調査では、本学の卒業生が総合評価で1位になりました。「行動力」が1位、「独創性」、「対人力」で2位、「知力・学力」で3位と全ての側面が高い評価を得ています。一般の大学が学術研究を重視しているのに対し、本学は現場主義・実践主義を重んじています。実践の現場での学びの過程を通して「考え出す力」を育くむ独自の教育システムを実施して来ました。これがこのような結果につながっていると思います。

さて皆さんは長岡技術科学大学で学ばれた様々な領域の専門をこれから社会で活かし、人類の幸福な未来社会を設計し切り拓く技術科学のリーダーとして活躍が期待されています。今の大変革時代において10年後、20年後を予測することは簡単ではありません。現在我々が直面する

様々な問題、課題を見つめ、これまでの歴史を振り返り、知識を広げ、想像力を働かせることが重要です。そのための素養として本学で多くのことを学んだはずですが、さらに、視野を広げ多くの書を読み思考と実践を繰り返し、学び続けていってください。そして、皆さんの大きな財産である同窓生ネットワークを十分活用してください。卒業・修了して社会で活躍される皆さんは、これで長岡技術科学大学と別れるわけではありません。明日からはOB、OGとして本学を応援し、また積極的に活用してください。長岡技術科学大学は、皆さんをこれからもずっと応援し続けます。

最後に、皆さんが、夢と志と勇気をもって、グローバルに活躍されることを祈念し、お祝いの言葉といたします。



卒業・修了を祝して



理事・副学長
(教育研究企画運営担当)

鎌土 重晴

Shigeharu Kamado



卒業・修了を祝して

大学院修了生および学部卒業生の諸君、修了および卒業、おめでとうございます。

諸君の在学中は東日本大震災後の復興期にありながら、本年度には熊本地震が起こり、先行き不安な気持ちであろうと思います。そのような中で、諸君は本学での所定の審査に合格し、本日博士、修士または学士の学位を取得できました。これは、諸君の不断の努力や研鑽の賜物であり、敬意を表します。同時にこれまで長きに亘って諸君を指導・支援をして下さった御家族、教員、先輩そして同僚への感謝の気持ちも忘れないでください。

今後、諸君は社会の荒波の中で生き抜かなければなりません。山あり、谷ありの人生を過ごすことになるのかと思います。まずはスタートダッシュできるように、今一度、心を引き締めて頂きたい。一方で、何事にも猪突猛進するだけでなく、時には立ち止まり、考えることも必要です。諸君の周りには多様な意見を持つ上司や同

僚、さらには学生時代の教職員や仲間がいます。多くの意見を聞き、自らの判断を下すように心掛けてください。

最近では、あらゆる学問の分野にとどまらず、また企業の大小を問わずグローバル化が急速に進みつつあります。本学でも先進国のみならず、東南アジア、中南米等のものづくり拠点となる地域の大学との連携、学生の派遣、受入れ等を推進し、教育研究のグローバル化にも注力してきました。一方で世界の情勢に転じると、英国のEU離脱、米国での「ポピュリズム」の台頭等が報じられるようになり、グローバル化への障壁になるうとしています。シリコンバレーで興った技術イノベーションや社会発展は、多様性の受入れ・尊重がもたらしたとも言え、グローバル化がそれを加速してきました。多様性を受入れ、尊重するには、「郷に入っては郷に従え」、すなわち、その地域の風俗や習慣、組織の規律を良く理解し、必要に応じて従うという気持ちを持つことが大変重要です。

自らのグローバル化、今後の人生の成功には「虎穴に入らずんば虎子を得ず」の心境で、積極果敢に攻めるという行動が必須となるでしょう。何事にも大いに挑戦してください。それらの成功体験の積み重ねが人生の大きな糧になります。

本学は、昨年6月に日経HRから発行されました「企業人事から見た大学のイメージランキング」で全国の確たる著名な国公立大学を抑え、1位という栄えある名誉を頂きました。諸君は就職される企業での大きな活躍が期待されています。本学で学んだことに自信を持って社会に羽ばたいてください。大願成就されることを心から祈っています。



長岡市長

磯田 達伸

Tatsunobu Isoda



長岡の“誇り”を胸に、未来にチャレンジを

長岡技術科学大学を卒業、修了する皆さんに、心からお祝い申し上げます。

皆さんは、豊かな自然に囲まれたキャンパスで、最先端の技術科学を学ばれましたが、長岡での生活においてこれはすごい、知り合いに自慢したいと思われたものは何だったでしょうか。

フェニックス花火、米、日本酒など長岡には自慢できる宝がいろいろありますが、是非、皆さんに憶えておいて欲しい長岡の“誇り”は、私心を抑えて身を律し、世の中の役に立つ「公の心」です。河井継之助や米百俵の精神で有名な小林虎三郎、阪神電鉄やアサヒビールの創設に関わった外山清造、山本五十六、さらに遡れば、良寛や上杉謙信、直江兼続など長岡の先人は、この高潔な精神性をもって、未来を切り拓いてきました。

この心は皆さんの心の中にもきっと息づいているはずです。なぜなら皆さんが学んだ長岡技術科学大学は「グ

ローバル産学官融合キャンパス」の構築を構想し、“技学”により未来社会に貢献する人材育成を進めているからです。地域性・独創性を極め、世界に通用する最先端の技術力と、奉仕の心を持って人々の生活を豊かにするという志は、まさに「公の心」に通じるところがあります。

世界中で大きな変化が起こっているなかで、長岡市は、これからも長岡技術科学大学とともに「公の心」を持って、明るい未来を実現するためにチャレンジし続けていきます。

そのためには皆さんからも応援していただき、さらに長岡の産業振興に関わっていただければありがたいと思います。

皆さんは、これからそれぞれの夢に向かって新しい道に進みますが、まずは社会に慣れ社会人の生活を大いに楽しんでいただきたいと思います。趣味や遊びだけでなく、仕事のなかでの出会いや発見、難しい課題への挑戦のなかにも楽しさはあります。この「楽

しさ」をエネルギーにして、未来に向けてチャレンジし、世界に大きく羽ばたいて欲しいと思います。

我々も皆さんが長岡に残りたい、あるいは帰りたいと思ってもらえるよう、長岡の魅力を高め活気あるまちづくりを進めます。

しばらくは新しい仕事や生活に夢中になり、大学生活や長岡のことは頭から離れてしまうかもしれませんが、一息ついたときや、困難が立ちちはだかったときに長岡のことを思い出していただき、そしてたまには長岡に足を運んでもらえると嬉しいです。皆さんの心の中に長岡があり続けることを願っています。

皆さんのこれからのご活躍を、長岡からお祈りしています。

卒業・修了にあたって

修了にあたって

修士課程 機械創造工学専攻 2年
長岡高専出身 | 吉荒 太一
Taichi Yoshiara

本学修了を迎えて、高専から編入学してからの4年を振り返ると非常に充実した期間であったと思います。講義や研究活動を通してこれから社会に出るために必要な力を養うことができました。特に国際会議で研究発表をしたことは私にとってとても貴重な経験だったと感じています。それまで私は海外に行ったことがなく、英語にも自信がありませんでした。しかし、ゼミで英語の言い回しを学習し、進捗発表を英語で行うことで少しずつ発表のスキルを身に付けて成長することができたと思います。また、国際会議へ参加したことが私の視野を広げ、これから社会に出てからも世界を舞台に活躍したいと考える良い機会になりました。そうした経験から、修了後の就職先には海外にビジネスの場を多く持つ企業を選びました。これまで学んできたことをベースに社会人としてさらに勉強し、社会に貢献できたら良いと思います。



ギリシャのクレタ島で開催された ECCOMAS Congress 2016にて

また、日々の研究生活において、最も重要だと感じたのは苦しいことから逃げずに戦う姿勢を崩さないことです。そうすることで少しずつ成果が出て、達成することの喜びを味わうことができました。これもひとえに在学中研究や講義でお世話になった先生方、支えてくれた友人達、ここまで学ばせてくれた両親のおかげです。心から感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。これからは社会人として、本学で共に学んだことを活かして頑張りたいと思います。



活発で充実した大学生活

修士課程 電気電子情報工学専攻 2年
新潟大学出身 | 永井 悟司
Satoshi Nagai

長岡技術科学大学での大学院生活において非常に充実した生活を送ることができました。今回は所属させていただいた伊東研究室(パワーエレクトロニクス研究室)での思い出についてお話をさせていただきます。プライベート面では研究室内でのイベントに加えて、他研究室と合同で行う球技大会や長岡花火観覧などたくさんの仲間との交流の機会が得られてメンバーとの交流を深めることができました。研究面では理論検討や実験検証を行う機会が多く、設備も充実しているのでレベルの高い研究を行うことができました。また、メンバーが多く在籍しているため様々な視点からの意見交換が可能であり、知識の幅が非常に広がったと実感しています。以上から、ON/OFFをしっかりと切り替えた研究生活が送れたと思います。研究成果については国内外の学会で発表する機会が多くあり、自分の研究成果

を世界に発信することができるので、モチベーションを高く持った研究活動ができました。さらに、学会先では国内外問わず様々な方々との交流を深めることができました。このようなつながりは社会に出ても大切になると思います。研究室で身に付けた技術力を活かして社会に役立つ仕事をし、さらに、人脈を広げられる社会人になれるように努めていきたいです。在学生の皆様におきまして、人と人とのつながりを大切に、自分のスキルを磨く大学生活を送ってください。



伊東研海の日2016

贈る言葉

卒業・修了を記念して

機械創造工学専攻長 教授 | 古口 日出男
Hideo Koguchi

この3月に大学を卒業・修了する皆さんに心から「おめでとう」の言葉を贈ります。4月からは社会人として仕事をしたいからでしょう。大学で学んだ事柄が役に立てられるか心配しているかもしれません。同じ気持ちを持っている人が周りにいることを忘れないで下さい。

皆さんが社会に出るにあたり読書することを勧めたいと思います。様々なジャンルの本が出版されているので、何を讀んだらいいかわからないという話を聞きます。今までの自分の興味以外の本を読むことで視野が広がります。私は学生の頃、古本屋でエルンスト・マッハの「マッハ力学」という本を買い、時間をかけて幾度か読みました。授業で習った事柄に対する歴史的視点とマッハ独自の説明が印象深く記憶に残っています。この力学に対する解釈は深い理解を与えるものとその時思いました。最近では哲学者の著述を超解釈して分

かりやすく書き直した本が多くあります。役に立つかどうかは分かりませんが、考える姿勢を教えてくれるものであると思います。将来、技術士の資格を持つ人もいます。いわば、スペシャリストです。私がかなり昔に讀んだA・ヴァン・ヴォークトの「宇宙船ビーグル号の冒険」という小説があります。この小説の主人公は、ネクシャリストのグローヴナーでした。ネクシャリストとは、スペシャリストだけでは解決困難な問題に対して、専門学問の分化が進み視野が狭くなってしまった学問分野間の橋渡しを行い、諸科学の成果を再構築し、実際の問題解決に役立てようと生まれた学問(情報総合学:ネクシャリズム)の実践者と記憶しています。これからAIの進化により技術者の役割も変わっていくと予感されます。どのように変わっても、自信を持って進んで下さい。今後の皆さんの活躍を祈念します。

贈る言葉

船出に向けて

電気電子情報工学専攻長 教授 | 和田 安弘
Yasuhiro Wada

卒業・修了おめでとうございます。ご両親・ご家族をはじめこれまで支援をされてこられた方々に心からお祝いを申し上げます。

私は、研究室の学生に色紙を頼まれると時々達磨大師の書を真似て書くことがあります。『人己腹心気』(人は大きく、己は小さく、腹を立てず、心は丸く、気は長く)、書を見たことがあるかもしれませんが。漢字の「人」を大きく、「己」を小さく、「腹」を横に書き、「心」を丸い文字、「気」を長く書きます。

私は、これを書いた後に、でも、君たちは若いだから、これと逆でも構わない、と書きます。出会った人の、素晴らしさ・大きさを感じて見習うことの重要性を考え、自分の未熟さを感じ努力すること、腹を立てずに反省をし、人を思い、気持

ちを長く持って将来の夢に向かって努力する。若いときは、時には腹を立てることもあるでしょう。自分を強くアピールすることも必要なのだと思います。年齢を重ねる毎に、こんな気持ちになっていければ素晴らしいと思います。

皆さんは、本学のモットーであるVOS(活力、独創力、世のための奉仕)を胸に創造的かつ実践的な勉学と研究に打ち込んでください。本学で学んだことは、問題に対する、自分で考えたアプローチだと思います。自信をもって自分を大きくすることも時には必要だろうと思います。皆さんのこれからの人生には希望に満ちた未来があります。力強くこれからの人生を歩んでください。これからの人生を、自信を持って切り開いて大きな夢を実現して下さい。



卒業・修了にあたって

技大が与えてくれた『chance』 夢へ向かって『challenge』

修士課程 物質材料工学専攻 2年 鶴岡高専出身 | 庄司 一輝
Kazuki Shoji

本学を修了するにあたり、温かいご指導をいただいた先生方、切磋琢磨し合った友人、そして家族に心から感謝します。編入して早4年、技大での生活を今思い返すと、自分を大きく変えた二つの『chance』を本学は与えてくれました。

1つ目は、本学の特色でもある実務訓練です。実務訓練では、日本の技術力の高さと社会で働くことの厳しさとやりがい学ぶことができました。新製品の性能評価に携わらせていただけるなど、普段の学校生活では学ぶことのできない体験をすることができました。この体験をもとに、幅広い知識の習得に取り組み、大学院の研究活動により一層励むことができました。

2つ目は、留学生との交流を通して、海外を意識するようになったことです。研究室や学校内には多くの留学生の方がおり、所属していたサークルでは共にスポー

ツで汗を流したり、留学生の研究指導などを通して、本学で世界を身近に感じることができました。

本学で学んだことを生かしつつ、様々な考え方に適合した技術力や幅広い視野を持ち海外でも活躍できる技術者になります。

最後に在学生の皆さん、長岡技術科学大学での他大学にはない強みを自分のものにして、希望の進路へ『challenge』し、頑張ってください。



研究室的思い出

ここで良かったと思う理由

修士課程 環境社会基盤工学専攻 2年 香川高専出身 | 丸岡 陽
Akira Maruoka

「技大に入るメリットって何ですか」私は高専4年生のオープンハウスの時、技大の先輩方にそう訊いて回りました。先輩方が強調したのは「人間関係が広がった」という点です。19歳の私には、その価値が理解できませんでした。19年間住み続けた四国を離れるためには、もっと横文字でキャッチーな価値が必要でした。

本当にここで良かったのか、と自問自答しながらも、結局私は技大に入学しました。今、修了目前に思うことは、ここで良かった、ということです。そして、先輩方の言葉は正しかった、ということです。

振り返れば、私の大学生活は人から学んだり、人と一緒に何かを作ったり、といった経験の蓄積でした。先生方に、何度も導かれました。アドバンスコースの仲間と、何度も競い、励まし合いま

した。研究室の仲間と、いったい何度夜を明かしたことでしょうか。

この人間関係は、4年間かけてじっくりコトコト煮込んで、やっとの思いで獲得した宝物です。人との繋がりを宝だと思える価値観もまた、本学で得たものです。私は恩師と呼べる先生方に出会えたので、博士後期課程に進みます。これからも先生や学生、地域の人々と繋がって、その関係を育てていければと思います。



短期留学したドイツにて

「われら戦友たち」 ～卒業・修了するみなさんへ～

贈る言葉

物質材料工学専攻長 教授 | 梅田 実
Minoru Umeda

表題は作家・柴田翔氏の小説のタイトルで、私が卒業する頃に同世代の支持を受けた一冊です。同氏は当時東京大学の現役教官でありながら、人気小説家として一世を風靡していました。その頃は、野村克也氏や村山実氏などのプレーイングマネージャー（野球監督兼選手）、小椋佳氏（銀行員兼シンガーソングライター）、新田次郎氏（公務員兼小説家）といった風に、二足のわらじを履く人生が圧倒的な共感を得ていた時代です。高度成長時代のスーパーマンに対する憧れが昇華した現象と私は見えています。

今の時代に翻ってみるなら、一人のスーパーマンは二人のスペシャリストに敵わなくなっています。むしろ、グローバル化が加速する昨今において座標軸を広げるべき方向は、地球儀の緯度と経度でしょう。本学の学び舎で物質材料に関する学問を修めてきた皆さんの専門の

活かし先は、地球上のあらゆる場所に広がっていますし、時代はそんな人物像を求めています。政治家の二重国籍は禁じ手らしいけど、ビジネスパーソンにそんな足枷は無用です。どんどん地球狭しと暴れまわってください。

一つアドバイスを。皆さんが社会に出るにあたって、ネットワークに留意してください。ここで強調したいのは、上記した複数人のスペシャリスト群が強い論理です。リオデジャネイロ五輪での日本チームの陸上リレーを思い出してください。そう。皆さんは本学で苦楽を共にした戦友なのです。たとえ社会で働く場は違っても、働き先が違ったとしても、思いのベクトルは合うし合わせられます。一人ひとりの思いが全員の思いとなる、そんな卒業式の情景を、皆さんを送り出す側の教員として、その日を楽しみにしています。



社会へ旅立つ 学生諸君への期待

贈る言葉

環境社会基盤工学専攻長 教授 | 杉本 光隆
Mitsutaka Sugimoto

卒業・修了を迎える皆さん、誠におめでとうございます。また、皆さんを支え続けたご家族の皆様にもお祝いを申し上げますと存じます。

皆さんは、従来の社会基盤構造物の構築から、サステナブルな社会への貢献や巨大大自然災害への対応を含むより大きな役割を期待される、建設工学のパラダイムシフトの中で、グローバルな活躍が期待されています。この期待に応えるためには、技術者の社会的責務を理解し、技術者としての倫理観を持たなければなりません。さらに、スペシャリストとして自己の専門分野への深い知識の涵養と、周辺分野を含む幅広い知識を有するゼネラリストとしての素養が、要求されます。こうしたことを身につけるには、本学建設系（現環境社会基盤工学専攻）初代系長池田俊雄先生が提唱されたOCDA、すなわち、Observation:

現象を観察・計測することにより把握し、Consideration: その結果と自己の有する知識を総合して熟考し、現象を論理的に理解し、Decision: どのような対応をとるかを決断し、Action: それを実行する、を日々実践していくことが肝要と思います。さらに、新しい分野を開拓する想像力や生涯学習能力も要求されます。

今、皆さんは、大学・大学院を卒業・修了し、これからいよいよ社会人としてスタートを切るといいます。人生の中でも大きな節目に立っています。これからの新生活へ希望に胸を大きく膨らませるとともに、若干の不安も抱いていると推察します。心配することはありません。いつの時代でも、誰もが抱く感情であり、皆が乗り越えています。本学で培ったものを基礎として、自分の羅針盤を持って、社会に漕ぎ出して下さい。

皆さんの将来に幸多かれと祈ります。



卒業・修了にあたって

研究者としての大きな一歩

修士課程 生物機能工学専攻 2年 八戸高専出身 | **杉山 あてな**
Atena Sugiyama

私は、生物工学から多くの人の命を救うことのできる研究者になるという夢を叶えるため、本学に入学しました。指導教授である糖鎖生命工学研究室の佐藤 武史 准教授には、3年半の間、厚いご指導を賜り、研究の楽しさと厳しさがわかる非常に充実した大学生活を送らせて頂きました。

特に、佐藤先生にご紹介頂いた、オランダ・ライデン大学メディカルセンター (LUMC) での実務訓練では、言語や文化の違いを乗り越えるのは勿論のこと、1つのデータに対して様々な分野の人と議論を重ね、効率的に研究を行う姿勢を学びました。自分の未熟さを身に染みて感じましたが、研究を多角的にとらえることで、自分の研究の将来を見据えることができ、更に研究の楽しさを知ることができました。

最後になりましたが、糖鎖生命工学研究室やLUMCの皆様以外にも、所属していた、PMCと技大サッカー部皆様、また、

青森で応援してくれている両親や友人達のお陰で、私は本学で研究者としての大きな一歩を踏み出すことができました。私はこれから他大学の博士課程へ進学致しますが、本学で培った経験と皆様への感謝を常に胸に留め、社会に貢献できる研究者となれるよう、より一層精進していきたいと思います。



LUMCでの研究室メンバーと



「プロダクト」から「ビジネス」へ

経営情報システム工学課程 4年 松江高専出身 | **笠巻 昇太**
Shota Kasamaki

大学に入りたての頃、自分は「プロダクト」を作るものだと思っていました。高専でも工学を学んできたし、大学も工学部に編入したのだから、将来はエンジニアになるのだろうと何となく思っていました。でも自分は、4月からベンチャー企業のWebマーケターになります。マーケターの仕事は多岐に渡りますが、簡単に言ってしまうと、潜在的にプロダクトを必要としている人達に「ビジネス」を通してプロダクトを届けることです。なぜ「プロダクト」から「ビジネス」を相手にしようと思ったのかと言うと、大学で経営系の講義を聞いて、プロダクトそのものよりもプロダクトを最大限生かすためのビジネスの方に心を奪われたからです。ビッグデータ・人工知能などと言われていますが、日本ではそもそもIT化も完全にはできていない状況です。今の日本はどんな問題を抱えているのか、それはどんなプロ

ダクトなら解決できるのか、どんなビジネスモデルにすれば事業を継続できるのか、プロダクトだけでなくもっと問題の本質的なところまで関わりたいと思いました。そのためにはビジネスとして成り立たせなくてはなりません。僕は長岡技術科学大学に入学し、プロダクトだけでなくビジネスまで視野を広げることができました。これからは、長岡技術科学大学の卒業生であることを誇りに思い、社会で活躍できる人材を目指します。



日本海を背に記念撮影



贈る言葉

長岡での思い出

生物機能工学専攻長 教授 | **福田 雅夫**
Masao Fukuda

御卒業・修了おめでとうございます。生物機能工学課程・専攻がスタートしてから諸君は25回目の卒業生、23回目の修了生ということになります。新設当時は、他の大学から赴任して実務訓練等に馴染みがなく高専を良く知らない教員がほとんどで、本課程・専攻は永らく半人前の評価に甘んじてきたように思います。しかし、四半世紀を経て半人前ではなくなったと感じるようになりました。

私も沖縄から北海道まで全国から来る学生の出身高専を聞いて知り合いの先生の顔が浮かぶようになり、高専とともに歩んでいると実感するようになりました。特にOBの活躍が最大の要素です。高専では、杉本敬祐(旭川)、宮下

美晴(茨城)、田中孝国(小山)、大岡久子(群馬)、大塩愛子(神戸)、堤主計(新居浜)、中村成芳(北九州)、大島賢治(熊本)の各先生が、海外では40周年記念誌に寄稿された山本健氏(Asia Modified Starch Co., Ltd.)や原啓文先生(MJIT, マレーシア日本国際工科院)らが、他にたくさんのOBが活躍しています。

これから長岡を離れる諸君の目の前にも大きな活躍のチャンスが待っています。長岡で学んだことや長岡での生活、特に長岡での人脈がチャンスをつかむのに役立つことを祈っております。また、本学のキャンパスでの思い出が諸君の人生の中で良きものとなり、本学の発展にも力を貸してくれることを祈ります。



贈る言葉

人生における選択

情報・経営システム工学専攻長 教授 | **山田 耕一**
Koichi Yamada

経営情報システム工学課程の卒業生と情報・経営システム専攻修了生の皆さん、おめでとうございます。修士修了の皆さんは、新専攻の第一期修了生になります。

さて、毎年この時期になると、私たちは卒業・修了する学生たちへの饒の言葉に頭をひねりますが、今年は皆さんと同じ頃の自分について述べたいと思います。

学生のとき、私は社会人になることを否定的に考えていました。会社の歯車として、日本経済や会社の利潤追求に貢献することに意義を見出せなかったのです。否応なく大学を出て会社に入り、残業が続き、仕事以外のことを考える時間がなくなると、仕事ばかりのモーレッツ社員になるしかないなら、エンジニアとして誇りの持てる仕事をしたい、そう思うようになりました。そして転職を繰り返し、ひょんなことから研究するようになり、大学にたどり着きました。

今は60歳の大台に乗っています。大学時代の友人たちは定年を迎え、第二の人生を始めています。彼らの近況メールを読みながら思うのは、高校生の時と同じように人生についてです。当時と違うのは、将来についてではなく、可能性としてありえた人生について考える点です。自分は何を重視して道を選択してきたか。大切にしてきたものは何か。仕事か、豊かさか、家族とのぎずなか。それは時によって違いますが、若い頃は仕事上の満足感を重視していたし、現在は私生活を大切にしたいと思っています。

卒業・修了していく皆さんは、これから何を大切に生きていくのでしょうか。もちろん、正解はありません。一生、考えが同じである必要もないでしょう。しかし、皆さんの選択が、結果として悔いのないものであるように祈っています。



卒業・修了にあたって

2年間を振り返って

修士課程 原子力システム安全工学専攻 2年
新潟県立国際情報高等学校出身

佐藤 彰紀

Akinori Sato

原子力は機械、電気電子、材料、情報・制御、建設、生物等の様々な分野を応用した分野であるため、本専攻には様々なバックグラウンドを持った学生が集まるという特色があります。私は学部時代には材料工学を学んできたため、本専攻に入学してから初めて原子力に関する知識に触れましたが、講義では原子炉の構造など基礎的な部分から丁寧かつ幅広く教えて頂けたので、入学前の心配は杞憂でした。また、システム安全の考え方もカリキュラムに組み込まれており、原発周辺の地域住民の方々と交えたディベートを行い、原子力技術者として求められるコミュニケーション能力も養うことができました。

本専攻は学外の研究機関と共同で研究を行うこともあり、私が所属している研究室でも修士2年生となってからは研究機関へ赴き修論作成へ向けた研究活動を行っていました。おかげで学生、社会

人と問わず様々な方と知り合い、自分の世界を広げることができました。さらに本専攻では国際学会へ参加することも多く、国内外問わず原子力に関する知見や、人脈を広げることができました。

このような充実した日々を過ごすことができたのも、支えてくださった先生方、同期生のおかげだと思っています。今後社会人として歩んでいく上で、本専攻で学んだ2年間はかけがえのない財産となりました。



国際学会での発表

学問に年齢関係なし

技術経営研究科 専門職学位課程
システム安全専攻 2年
早稲田大学商学部出身

川口 昇

Noboru Kawaguchi

私は、アメリカの安全認証機関の日本法人である(株)UL Japan に勤務しております。安全認証機関での仕事も10年目に入り、実務だけでは限界を感じてきた頃の2年前の55歳の誕生日に、安全を体系立って学びたいと考え、本学のシステム安全専攻に出願することを決めました。安全のプロとして実務に従事しているものの、55歳という年齢と文系出身であるにも関わらず、無事入学し勉強の機会を頂く事ができました。

入学後は、若い技術系社会人の同級生についていけるのか不安がつのりました。そこで、ハンディを乗り越えるには、人の倍の時間をかけ、良い成果を残すには更に倍やればよいと考え、長期の休みには朝から晩まで課題に取り組みました。幸いなことに、諸先生方の丁寧な指導と

体系だったカリキュラム、同じ志を持つ同級生の皆様のお蔭で、楽しく授業に課題に取り組むことができました。特に長岡の授業の後、学内の宿泊施設である匠陵クラブで深夜まで授業の内容や安全について同級生と議論した事は一生の宝と考えています。このような恵まれた環境の中で、勉強に取り組んだことは生涯の自信につながります。

4月からは、博士後期課程に進学させていただけることになりましたので、安全を学問と実務の両面から捉え、今後の研究に取り組んで行く所存です。

末筆では御座いますが、このような素晴らしい機会を頂きました大学と諸先生方に御礼を申し上げますと共に、長岡技術科学大学の益々の発展を祈念させて頂きます。



贈る言葉

ご卒業おめでとう

原子力システム安全工学専攻長 教授

鈴木 雅秀

Masahide Suzuki

原子力システム安全工学専攻においても、春の香りが立ち込めてくる3月、4月は、ここで2年間学んだ学生が夢を抱いて就職や進学をしたり、新たな学生が入学してくる活気あふれたシーズンです。一方で、長く原子力に携わってきたものにはどうしても3.11のことが蘇ってきます。原子力の安全とはなんだろうか、今でも考え続けている私にとっての永遠の課題です。

私の好きな言葉に「着眼大局、着手小局」というのがあります。ある将棋のプロ棋士が好んで色紙に書いたものですが、原子力の研究を行っていく上でも実に共感できるものです。巨大なシステムの中で安全というのは、俯瞰的に見て行く必要があること、見落としがないことが重要で、その中で着実にひとつつ

とつ継続的に改善を行っていかねばならないものだからです。原子力安全とは、ある到達した状態というより、努力して改善していく過程の方にこそ意味があるのだ、と思っています。永遠の目標であり、そこにはプロとしての力が求められます。

ちなみに、「着眼大局、着手小局」の語源は荀子という古代中国の思想家に由来するものです。荀子といえば、「青は藍より出でて藍より青し」、という言葉の方が皆さんには馴染みが深いかもしれません。

原子力に限らずいろいろな職場や研究の場等に進まれると思いますが、どうか卒業生には、出藍の誉れになって頂きたいという願いも込めて、荀子の言葉を「贈る言葉」としたいと思います。皆様のさらなるご活躍を祈念します。



贈る言葉

それぞれの専門分野で安全のエキスパートとしてご活躍する皆さんへ

システム安全専攻長 教授

平尾 裕司

Yuji Hirao

システム安全専攻を修了された皆さん、誠におめでとうございます。責任ある社会人としての仕事とシステム安全専攻の勉学を両立したこの2年間の多大な努力に敬意を表します。

皆さんは2年前に高い志を抱いてシステム安全専攻に入学されました。最初は授業内容がなかなか理解できず苦労されたことと思います。学生の皆さんのそれぞれの専門とする領域のことを相互に教え合い、授業後にも情報交換を活発に行ううちに授業科目の体系も徐々に把握できるようになり、今は自分自身に大きな自信をお持ちではないでしょうか。

システム安全専攻は、設置後10年が経過しましたが、これまで設立以来一貫して、安全技術とマネジメントスキルを統合して応用するシステム安全に関する実務教育を通して専門職を育成してきました。システム安全専攻修了生は、社会の

いろいろな分野で安全のエキスパートとして活躍しており、何人かは日本における安全の中核となる機関・組織で活躍されています。また、東京国際フォーラムなどで年2回開催している最新の安全に関する講演会、OB会には多くの修了生が参加しています。このようなしっかりとした修了生と大学のつながりは他の専門職大学院にはなく、システム安全専攻の方針が皆さんから支持されている証しと考えております。

これからもシステム安全専攻の基本方針は変わりませんが、よりよい安全社会を構築するためには、経営にも安全の専門家として意見できる人材の育成も重要と考えています。システム安全専攻修了は生涯学習の新たな始まりです。今後も自己研鑽に努め、それぞれの専門分野において安全のエキスパートとして活躍されることを期待しております。



長岡技大で学んだ7年間

博士後期課程 材料工学専攻 3年
函館高専出身

武田 健太
Kenta Takeda

私が高専から本学に編入学して7年経ちました。時が経つのは早いものです。初めて長岡の地に来たときのことを、昨日のことのように思い出します。この7年間で、市内は目まぐるしい変化を遂げてきました。街並みが変わっていくのを見ると、私がそれだけ長岡に長く暮らしていることを実感しています。

学生生活を振り返ってみると、学部では授業が非常に多く、苦勞した思い出があります。その分レポートも多く、大学で出会った仲間と一緒に作成したのは、今となっては良い思い出です。また、長期の実務訓練も経験し、社会人としてのマナーなどを学びました。大学院に入学してからは、研究に明け暮れた日々が続きました。研究生活が良いことばかりではなく、つらいこともありました。しかし、研究室のメンバーと談笑すること

で、前向きな気持ちになり、次への一歩を踏み出し続けることができました。

本学では、勉強のみならず、研究のアプローチ方法など、多くのことを学びました。最後になりますが、これまでご指導いただいた先生方、遠くから見守っていただいた両親に感謝いたします。本学で学んだことを活かし、研究者、そして教育者として精進して参りたいと思います。



研究室メンバー(忘年会にて)



卒業おめでとうございます



同窓会 会長

磯部 広信

Hironobu Isobe

新潟県立上越総合技術

高等学校教諭

卒業・修了される皆さん、おめでとうございます。同窓会を代表して心からお祝いを申し上げます。そして同時に、長岡技術科学大学同窓会の正会員になられました。心強い仲間を迎えることができ、同窓会は益々意気軒昂であります。

さて、近年、自動車の自動運転技術が続々と実用化されています。それに伴って、今後かなりの長期間、自動ブレーキの車とそうでない車が混在し、「止まってくれと思ったら・・・」という事故が懸念されています。運転中や歩行中、これまでと違う注意の払い方が必要になってくるでしょう。私達は車の能力を過信することなく、「自分の判断」を大切にし、事故を防がなくてはなりません。

皆さんは在学中も今後も、技術開発の最先端に立ち、時代を牽引していく優秀な個性です。

しかし、人間あつての技術です。車(道具)を使うかどうかを、目的地を、休憩の取り方を決めるのは私達です。そして、どんな技術が搭載されても、「弱者である自分」がほんの少しの力で1t、2tもある巨大な物体を動かしている危険性を常に忘れずにいたいと思います。

どんなに時代が変わっても、必要なものを取捨選択し、大切なことは「自分で判断」する。その大切さは変わることはありません。

最先端技術の現場にあっても、自分を大切に、他者との関わりを大切に、人に恵まれて幸福な人生を送っていただこう、心より願っています。

贈る言葉

「曲がり角」のむこうには

基盤共通教育部長 教授

北谷 英嗣

Hidetsugu Kitatani

卒業・修了おめでとうございます。皆さんを日々支えてこられたご家族の方にも心からお祝いを申し上げます。皆さんは、今まさに自分自身の選んだ道をそれぞれ進んで行くという一つの大きな「曲がり角」(転機)に差し掛かっていることになります。

私自身の経験から言っても、今後も様々な場面で「曲がり角」に出会うことになると思います。曲がった先がどうなっているかわからないとき、判断を下すよりどころとなるのは、本学で学んだことを含め、それまでに培ってきた知識・知恵・仲間等です。そのためにもこれからも鍛錬を怠ることなく精進してください。でもどの道が正しいなどということばかりにくだらない

かしれないし、二つ以上あるかもしれません。でも、一度決めたらその道を次の「曲がり角」までは振り返ることなく突き進んで下さい。散々考えて決めた道ならそれが正解だと思ってよいでしょう。

でも、やはり十分な知識、とことん(論理的に)考える力、仲間(友人、相談相手)は必要ですね。これから自分自身をより充実させながら、頑張っていくして下さい。

人の蒔くところ 刈るところとなり



むつみ会 会長

樋口 里子

Satoko Higuchi

長岡地区 保護司・薬物乱用

防止指導員

日本・インドネシア経済協力

事業協会地域指導員

お祝いの言葉にかえて活動の様子を報告致します。

暮れも迫るころ、留学生のアパート掃除を手伝いに来て欲しいとの連絡がありました。スリランカの学生で市営アパートに家族と5年間住んでいましたが、家族は一足先に帰国しました。学生寮に入ることになり、その引っ越しでむつみ会のスタッフは留学生と二人で掃除を始めて5日間も経過したということです。職員が確認に来るので仕上げの手伝いと要請で他のスタッフにも声がけして出かけました。無事に掃除を終えて帰るころ、新入会員のスタッフが引っ越し・掃除のことまでやってきたのとおどろきました。私たちはこうやって28年間続けてきたと話しました。

水曜日は、交流ラウンジではインドからの留学生で卒業後も長岡で就職した

ファミリーも見えました。子供が小学校に入学するまでに日本語を確実に勉強させたいとの依頼があり、牧野さんがそのお手伝いを引き受けてくださいました。

3月にはインドで留学生の結婚式があり、日頃から交流を続けているスタッフ夫妻が招待されています。

帰国途中でスリランカに立ち寄り、留学生と再会する予定です。留学生と共にむつみ会会員の蒔いた一粒の種は、現在多様な花を咲かせ交流・親愛の豊かな実を結んでいます。

今日まで長きにわたり交流の場を提供していただいた大学をはじめとし、協力を惜しまず支援してくださいました皆様に感謝しお祝いの挨拶いたします。

全国高専めぐり

シリーズ

第二十九回

釧路工業高等専門学校

東北北海道の教育・研究拠点として、問題解決能力を持った技術者を育成する

独立行政法人 国立高等専門学校機構 釧路工業高等専門学校 校長 岸 徳光
Norimitsu Kishi



釧路高専は、昭和40年高専四期校として設立され、平成28年に機械工学科、電気工学科、電子工学科、情報工学科及び建築学科の5学科を「創造工学科」の1学科に改組再編しました。

本校のある釧路市は、製紙業、漁業、炭鉱といった産業により、東北北海道の中心として発展してきました。近年は国土交通省から「観光立国ショーケース」に選定される等、世界三大夕日、マリモや丹頂鶴、釧路湿原といった資源を活かした

観光にも力を入れています。

本校の最大の特徴は、学科を1学科に統合したことにより、自分の専門分野以外の他分野の専門領域も学ぶことができ、分野横断的な問題解決能力を養うことが可能になるということです。

具体的には、4年次にテーマ毎に異なる専門分野の学生が集まり課題を解決する「複合融合演習」を設定しました。例えば、「スマートホーム」という実験住宅の中で、建築設計、家電、インターネット、

発電など、従来の5学科の内容を全て学べることに加え、従来の専門だけでは解決できない課題をその場で解決したり、IoT活用といったこれからの日本を支える技術を習得することもできます。

このように、実践を通して課題を解決することができる技術者を育成することにより、東北北海道の教育・研究拠点として、地域の発展のために貢献していきたいと考えています。

釧路高専URL：
<http://www.kushiro-ct.ac.jp/>



校内体育大会(駅伝)



エンジニアクラブ
(子ども向け講座)



世界三大夕日(釧路港)

釧路高専 から 長岡技大へ



修士課程 機械創造工学専攻 2年

小山内 翔太 Shota Osandi
釧路高専機械工学科平成25年3月卒業

多様な価値観に触れる

中学生頃から自動車に興味を持ち、いつか自分で作りたいと考えていたため高専へ進学し、さらに知識を深めたいと考えたため、本学へ進学しました。入学後は、材料強度・接合工学研究室に所属し、異種材料の接合強度に関する研究を行っております。実験では、高専で学んだ基礎知識を多く活用するため、高専での経験を活かすことができます。

また、研究室には多くの留学生が在籍しているため、進捗報告を英語で行うなど、英語を使う機会がたくさんあります。留学生に英語で説明する場面もある

ため、簡単にですが英語を話すことができるようになりました。将来は英語を使わなければいけない場面が多いため、英語を練習する良い機会になると思います。



留学生との交流

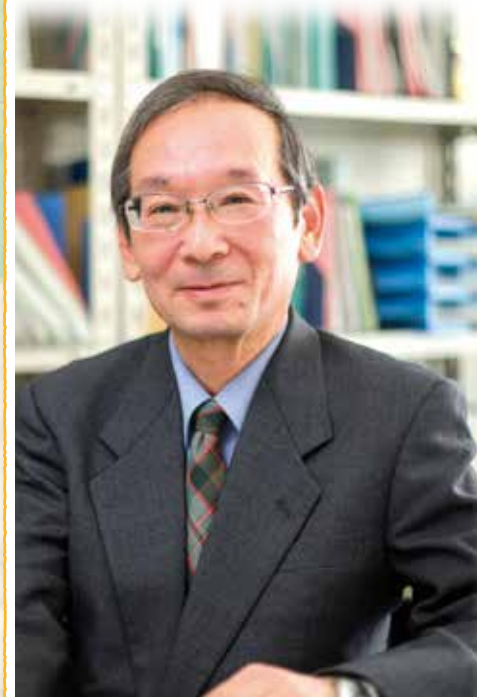


退職にあたって

退職にあたって

副学長(教育研究推進担当)
物質材料工学専攻 教授

小松 高行
Takayuki Komatsu



1981年に本学に着任した時、初代学長の川上正光先生から「日本の理想と知的謀反の進め—新しいものは常に謀反である—」という先生の新しい大学のあり方に対する思いが詰まった寄稿文を受け取りました。そこには、「大学は新しい学術・技術を創造する所であり、学生に考え出す力をつけてやるのが教授諸君の腕の見せ所である」と記されています。助手、助教授、教授と立場は変わっても、常に、本学の学生にどう教育をすべきか、また、私自身はどういう研究をすべきか、試行錯誤を繰り返してきました。ガラスおよびガラスをベースにした新しい機能性材料の開発研究を通じて、学生には考える力、多面的なものの見方(柔軟性)、新しいことに対するチャレンジ精神が身につくように指導してきました。グローバル化への対応に必須な実践的な英語力

の向上にも私流に取り組みました。有難いことに、指導学生の研究からは多くの先駆的な研究成果が生まれ、ガラス研究に関しては、本学を世界的に評価される位置に高めることができました。卒業生/修了生の社会での活躍も大きな喜びです。高専出身者の1人として、高専入学以来50年にわたる“学び、研究、教育、様々な人々との出会い”を技術科学という場で実践、継続できたことに感謝いたします。いつの時代であれ、すべてのものは、常に変化し続けることは自明ですが、本学の源泉である新構想大学理念は、今もって、その輝きを失ってはいません。本学から、独創的な技術科学の創造が絶え間なく発信され、VOSの精神に満ちた人材の育成を含め、本学の魅力と活力がさらに輝くことを期待しています。

長岡での26年

附属図書館長
生物機能工学専攻長 教授

福田 雅夫
Masao Fukuda



本学に来てから26年経ちました。赴任した頃は毎冬1m近い雪が積もり、雪国育ちでない私は雪国の生活を結構楽しみました。当時のボスの矢野圭司教授が米国ミシガン州立大のJ.Tiedje教授と組織したJSTの国際共同研究プロジェクトのGLになり、米国側との打合せや共同研究ラボの設置で忙しく、金原和秀助教(現静岡大教授)と睡眠時間を削る生活でしたが、人生で最も濃密な日々でした。

政井英司教授や産総研の鎌形洋一研究戦略部長がボスドクとして参加し、付き合いが始まりました。このプロジェクトで取得したPCB分解細菌RHA1株は分解酵素遺伝子解析や、千田俊哉助教(現・高エネ研教授)と組んだX線構造解析などで私の打ち出の小槌になりました。その成果に注目したブリティッシュコロンビ

ア大のL.Eltis教授から全ゲノム解析の提案があり、平成13年から5年間の共同研究をしましたが、ポストドクを求められ、学位を取ったばかりの原啓文君(現・MJIT准教授)を送りました。

また平成16年からスタートした21世紀COEプログラムでは、生物系以外の先生方と縁ができ、その縁で河原成元准教授とハノイ工科大学のP.T.Nghia講師が準備したJST-JICAの天然ゴムにかかわるプロジェクトを山口隆司教授らと手伝い、ベトナムに思い出が沢山出来ました。

このように長岡での人生は多くの方々との出会いで支えられてきました。人生で最も長い時間を過ごし、最も充実した日々を経験したキャンパスが、未永く発展し続けることを心から祈ります。



退職にあたって

退職の挨拶

機械創造工学専攻長 教授

古口 日出男

Hideo Koguchi



大学を卒業し、1981年10月に東京商船大学の応用力学研究室に助手で採用されてから35年6ヶ月になります。長岡技術科学大学に奉職したのは、1984年1月の大雪の年でした。翌年も大雪でしたので、当時は大変なところに来たものだと思っていました。こちらに来た当初は、周りの状況がわからず戸惑いもありました。当時の同僚で本学におられる方は金子先生、伊藤先生です。当時助手会という教員（福澤、佐久田、岡田、金子、古口）のサークルのようなものを組織して、わいわいやっておりました。伊藤先生は少し遅れて助手会に入られたと思います。機械系では、情報処理関係の授業の立ち上げを行い、これまでマルチメディアシステムの維持・管理をしてきました。はじめの所属講座は固体システム講座でしたが、

色々な実験と解析を行いました。大学に来た頃は、メニスカス不安定現象の実験と解析を行いましたが、固体システムに所属しながら流体の研究を行っていたので、少し場違いの感がありました。その後、機械情報・制御講座になり、計算力学に主眼をおいて異材接合体、逆解析、接触解析、分子動力学による界面の研究を行い、50代半ばの時に異方性弾性論の勉強をして、Stroh形式による定式化を覚え、ナノメカニクス理論を使った異方性弾性体の解析を始めました。まだ道の途中でと言えます。学内、学外ではJABEEの立ち上げ、受審、学会活動、学科内、学内の色々な仕事をさせて頂き、多くの方々にお世話になりました。心から御礼申し上げます。本学の益々の発展を祈念して、退職の挨拶とさせていただきます。

環境社会基盤工学専攻 副専攻長 教授

力丸 厚

Atsushi Rikimaru

次世代を担う方々へ



2000年12月に長岡技術科学大学に赴任してから早いもので16年あまりが過ぎ、いよいよ退職の時となりました。赴任した当時、新設の小講座には、先に着任された向井幸男教授、高橋一義助手が既におられましたが、私を含めて3人とも新任で勝手がよくわからない状態で、毎日が試行錯誤で、研究室運営を行っていた時のことが思い出されます。そのような当時から、多くの皆様方がいろいろとご指導・ご助言していただき、この16年間で、なんとかやってこられたことを、心から感謝いたしております。

さてこれからは、次世代の方々に研究や教育を担っていただくことになります。若い方々の熱意や行動力に、おおいに期待しております。加えて、次世代の方々に、われわれ世代で得てきた研究方法のノ

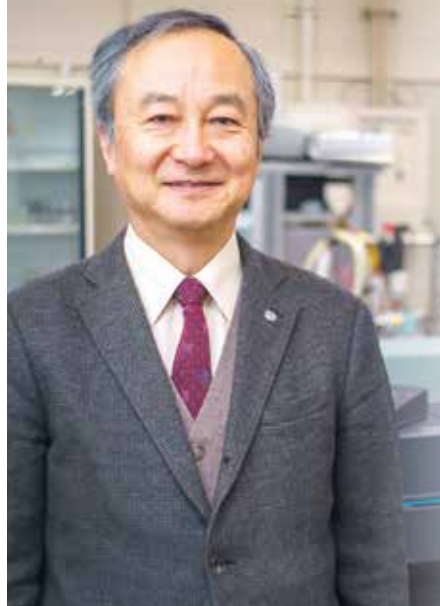
ウハウも、なんとか継承していただきたいと願っております。公式に残っている論文を読むだけでは、研究を推進したノウハウがうまく伝わらないことも多くあります。なぜなら論文に記述した内容の多くは、成功事例を中心に綴っているからです。論文にならなかった貴重な失敗事例を語り継ぐことも、研究の課題に関する問題意識を深め、研究のノウハウを把握するためには重要です。失敗事例を含めた過去からの研究のプロセスを辿ることは、未来への研究開発の切り口を探すヒントを含んでいる場合があります。最新の研究成果をサーチするだけでなく、過去からの研究プロセスをもう一度振り返り、研究方法のノウハウが次世代に継承されていくことを、強く望んでいます。

Something new, interesting new and useful new!

機械創造工学専攻 教授
国際連携センター長
学長補佐（国際交流担当）

伊藤 義郎

Yoshiro Ito



何年かのOD生活を経て、長岡技術科学大学へ採用していただいてから、32年経ちました。新幹線が上野まで開業した年で、関越トンネルはまだ開通しておらず、東京から車で来る時には、三国峠を越えてきたこと、車窓から見た魚沼や長岡の水田の広がり驚いたことを覚えています。

周囲の皆様のご理解とご支援で、言いたいこと（の半分位）を言い、やりたい研究をかなり自由にさせていただきました。長岡に来て数年経ってから、レーザー応用、レーザー加工の研究を始め、今までやって来ました。Something new, interesting new and useful new! を目標に、世界初演を目指した研究を進めて来ました。うまくいった事、いかなかった事、様々ありましたが、いくつかのinteresting newは達成できたと思いま

す。常々、レーザーの研究は、手持ちのレーザーに縛られる、と言って来ましたが、様々な支援をいただいて、時間はかかったものの、かなりの装置を整備することもでき、今振り返ると、楽しい研究生を送ることができたと思っています。レーザーなどという慣れないテーマに、苦しみながら取り組んでくれた多くの学生、また、共同研究者の方々に感謝です。

工学や技術には、なんか分からんけどこうすれば出来た、という面が多くあります。そこに隠された「理」を明らかにしようとする姿勢が、「技学」なのかな、と私は思っています。物事を簡単に信じないで、本当かな、どうなっているのかな、と深く追求する素直でない人物こそ、イノベーションを成し遂げる人でしょう。本学から、このような人物が排出することを、願っています。

越後閑話

情報・経営システム工学専攻 教授

松井 志菜子

Shinako Matsui



初めての長岡の朝。ピリッと冷たい風は心地よく爽やかでした。学生は純粹で、毎週の課題に挑む。双方向の授業は談論風発。新鮮、感動です。材料を工夫し黙々とロボコンに挑戦する学生。素敵です。一途な若者気質がこの大学にはありました。専門職大学院生は赴任先の海外から通い議論討論の連続でした。教育への熱い思いは深まり、やりがい、生き甲斐を感じました。学生の意欲を引出し、学問や研究の面白さを知り、教員は若者から力をもらい成長すると確信しました。宇宙、医学、ICT、科学や技術への関心も広がりました。

企業勤務時代は経済協力関係の仕事に携わり、人種、民族、宗教、政治、経済、文化、歴史が異なる多様な価値観やものの考え方の相違を考える契機となりました。ムスリムの留学生にアラビア語やイスラム教を語り、仏教信仰のアジア、クーデターや紛争の絶えない中近東、国家経済破綻を経た中南米諸国、東西冷戦終結、民主化運動、国家分裂や戦争終結後の国家統

一、国家や権力の危うさを知る国の留学生との交流は印象深かったです。また国際機関が集まるアルザス・ロレーヌ地方の都市ストラスブールでの教育経験は有意義でした。世界情勢が刻々と変わる現代社会、今後も未来を生きる若者との対話を続けていきたいと思っています。

信濃では千曲川、越後では信濃川。日本海への雄大な流れの川面に映る朝陽の輝き。車窓に映る魚野川の朝霞と穀倉地帯。山膨らむ八海山の雪解けのせせらぎ。残雪からのぞく路の臺や小さな白い水芭蕉。片葉の可憐な花。桜吹雪の散策。新緑。田植えと蛙。薫風。戦禍の長岡市の鎮魂花火と蟬。金色の稲穂垂れる秋の夕暮。鈍行列車での雪景色や厳寒怒涛の日本海、真冬の雪山歩きを満喫しました。豊かな自然と穏やかな人々の暮らしに触れた貴重な経験に感謝です。学生に贈る言葉は而今（じこん）です。今を精一杯生きる意味です。ありがとうございました。



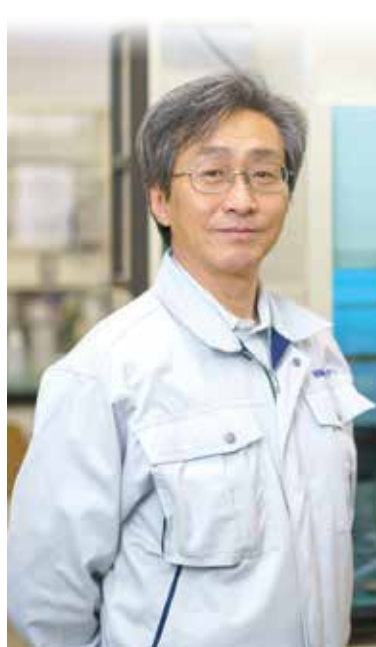
退職にあたって

定年にあたって

技術支援センター
化学・生物分野長

三間 達也

Tatsuya Mitsuma



本学に赴任する以前は昭和50年から56年の7年間、当時あった科学技術庁の研究所に勤務し金属関係の研究に従事しました。途中知識不足を痛感し4年間夜間の大学に通い、社会人と学生の二重の生活も経験したことは、忙しくはありましたが良い経験でした。

当時の上司のポリシーは「研究とは新しいことをすることで、既成の装置や測定器で事足りるものではない」とのことで、装置や測定方法の工夫に多くの時間を費やし、専門外の知識の取得も必要でした。測定機器の多くに改造を加えることに時間を費やしたことも覚えています。当時はまだアナログの機器が主流であったため素人でも手を出すことができました。

化学の技術職員と聞いていて本学に話

を伺いに来てみると、募集は機械の技術職員でしたが当時の機械系長であった手嶋先生から「今後は境界領域の研究が増え、専門外の仕事はできない・やらないでは通らないよ」との助言を頂いたこと、前職の経験から本学に移ることを決意しました。

本学での支援先は、先生が不幸にして亡くなられたり、新天地を求めて他大学に移られたり、また私の配属先が機械から生物に変更になるなどで複数回変わりましたが、その都度温かくご指導いただいた先生方や、諸先輩からのアドバイスで、何とか定年を無事迎えることができました。

ご教授頂いた多くの皆様に感謝いたします、大変有り難うございました。

編集後記

早いもので今年度もあと僅かを残し卒業・修了の季節となりました。

期待と不安が入り混じったこの時期、この号が出る頃には卒論・修論発表も一段落し、卒業・修了を控えた学生諸君は新天地での生活に想いを馳せていることと思います。まだ卒業・修了が1年後という学生も、卒論・修論発表で忙しい先輩の姿を未来の自分に重ねつつ、いよいよ本格化する就職活動に戦々恐々としているのでしょうか。皆、一度は経験する道です。がんばって乗り越えてくれることを、毎年、顔の違う学生を見守りながら、同じように祈っています。

VOSの由来 本学のモットーである、Vitality, Originality, Servicesの頭文字をとって、本学初代学長の故川上正光氏により名付けられました。



VOS NO.198 [平成29年3月号]
編集発行 長岡技術科学大学広報委員会

◎本誌に対するご意見等は下記までお寄せ下さい。

〒940-2188 新潟県長岡市上富岡町1603-1

TEL. 0258-47-9209 FAX. 0258-47-9010 (学長戦略課)

E-mail : skoho@jcom.nagaokaut.ac.jp URL : http://www.nagaokaut.ac.jp/

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。